薩摩川内 まごころ文芸コンクール

銀賞

お父さん 起きろ

岐阜県　主婦　杉山　ミサ子さん（64歳）

私は、子供達に、どれだけ励まされてきただろう。幼い二人の子供達の素直で真っ直ぐに伝わる真心に支えられてきた。実は下の息子が入学する直前に、主人は癌で亡くなった。

葬式の日。未だ死が、理解できない息子は、横たわったままの父が、寝ていると思っていたのだろうか。棺おけが火葬場の炉へ入れられようとしたその時、突然大声を張り上げた。

「お父さん、起きろ。起きろおおお」

私は思わず息子を抱きしめた。大好きな父親との受け入れがたい別れであった。

その後のぼんやりとした記憶。今でも一体何をしていたのか覚えがない。ただ当時を象徴するワンシーンだけは、頭から離れない。

それは、クリスマスに近い日の夜のことだった。寒くて母子三人がくっつきあって一つの布団の中にいた。毎晩こうして本を読むのが日課だった。私はどちらにも聞こえるように胸にのせた本を読み始めた。娘が選んだマッチ売りの少女。最後のページを開くと、「最後のマッチを擦った時、サーッと明るくなった空から大好きなおばあさんが現れました」。ここでいきなり息子はふとんから飛び出すと、仏壇からマッチを持ってきて私の手に握らせた。

「お母さん、お父さんに会いたいんでしょ。会えるよ」

真剣な目でいたわるような優しい眼差しに出会った。思わずこみ上げる涙。暖かい涙が、心の空洞に流れ込む。気づくと、私の寂しさは、癒されていた。

今でも私は、仏壇のマッチを握ったまま泣いたおかげで今日まで生きる事ができたと思っている。真心とは、自分を忘れて人を思いやる行動であろう。

真心を向けられた相手は、それだけで、勇気を与えられる。くじけそうな私は、何度も何度も勇気をもらって、今日まで生きてこられた。今私は、貰った勇気を地域のお年寄りに向け始めた。共に、生きたいと思う。

銀賞

十七年目の進化

東京都　会社員　柴　理恵さん（47歳）

私たち夫婦が一泊二日の温泉旅行にでかけたのは、夏休みが始まったばかりの週日だった。二日目は、宿から車で十分の距離にある個室貸し切り温泉施設に立ち寄る予定だ。

「ここから歩いていくのは無理ですよ」

宿の人はそう言った。だが、私たちは普段からのウォーキングで鍛えている。足には自信があった。

「車で十分ということは、歩けば三十分だね」

簡単な観光案内の絵地図を片手に、私たちは宿を徒歩で出発した。それが間違いの元だった。

観光客をもてなすため、道なりに吊るされた風鈴が清らかな音をたてる。最初の三十分は、まだ色を残した紫陽花や、群れて咲くオニユリを指差し、ゆったりした気分でおしゃべりをしながら歩いた。

おかしいと思ったのは、四十分を過ぎたころだ。道に迷ったのか、あたりにそれらしい温泉施設は見えてこない。夫は次第に寡黙になる。バスもタクシーも人影さえも見当たらない山道である。ともかく歩くしかない。

日は高くなり、荷物がやけに重く感じられる。汗っかきの夫のTシャツはもうぐっしょり濡れている。

一時間以上歩いた末に、ようやく目的地に到着したときの嬉しさといったら！　早速、キンキンに冷えたビールと川を望む露天風呂で労をねぎらう。夫が言った。

「さっきはごめん。黙って歩いて。余裕がなくて、声をかけてあげられなかった。ああいうときこそ男の真価が問われるのに。俺は、まだまだだな」

驚いた。何も言わずに歩き続ける夫の背中を見ながら、私はむしろ感心していたのだ。不機嫌なのは間違いないが、愚痴を言ったり、怒り出さないとは我慢強い、と。

ああ、この人はまだ進化するんだ。

夫がまぶしく見えた、結婚十七年目の夏である。